

# 末黒野

すぐろの



S. Iwamura

9月号  
(通巻901号)

## 路肩

泰然と泰山木の花錆びて  
糠雨にこもる雀ら椎若葉  
日の洩れぬ樹下の明るくえごの花  
仏めく岩の迫り出し谷若葉  
青大将かかげ男の子の得意顔  
薫風や湖へと下る九十九折  
十葉の路肩繕ひ朝日影  
独活の花丈を揃へて線路脇  
雲垂れて匂ひ沈みて栗の花  
急磴の狭き踊り場額の花  
それぞれの子らの成長立葵  
帰るさの能楽堂やほととぎす

森清堯

## 湾薄暑

ぼうたんのはらりはらりと影やせて  
鬼瓦据ゑある地面牡丹散る  
遠に塔こちにビル群湾薄暑  
夏の日を返す窓々摩天楼  
赤潮や停泊長き飛鳥Ⅱ  
汐入の運河錆色夏霞  
ゴンドラへ光一闪夏燕  
赤潮や芥留むる船溜り  
白百合を門に港の古きバー  
松籟や千波万波の夏の海  
灯台へ続く馬の背昇り藤  
膨らめる大樹へ朝の夏日かな

岡野里子

薔薇燃ゆる

黒滝志麻子

(顧問)

カウベルの響き長閑や牧の昼  
浜昼顔午後より白き沖つ波  
山からの風のしめりや蛍の夜  
一艘の船足早し卯波立つ  
藻を乗せて波寄せくるや麦の秋  
風あらば風七色に薔薇燃ゆる  
涼しさや一筆箋の青インク  
ときをりの風の捻子まく時計草

甲矢集



配列は音順(月毎の循環)

夜の素馨

菅野日出子

新緑の風のうながす試歩の杖  
この痛み神の助けを明易し  
寢室の窓一閃の夏燕  
電線に親待ちて鳴く燕の子  
病床の窓よりほのか夜の素馨  
雨ほしや紫陽花の藍うなだれて  
梅雨いまだ鉢植糸の花たえだえに  
しどけなく終るネモヒラ夏の雨  
友よりの見舞の電話梅雨に入る  
病んで知る子の有難さ羽抜鳥

円弧の灘

田中臥石

郷愁を誘ふ夕べの田の蛙  
九十九里の灘の円弧や遠雲雀  
甘草を摘めり背中へ海の音  
自転車を漕げり真つ向青田風  
新緑の机にでんと広辞苑  
菖蒲田に寺鐘のひびく水の皺  
館山の青葉なだるる崖仏  
ワクチン注射待つ間の樹蔭風薫る  
父の日のワクチン注射で終りけり  
掴みたき郭公のこゑ松林

## 白菖蒲

森清信子

初夏の日差を弾く湖畔かな  
岬鼻の雲より醒めてえごの花  
白菖蒲白を極めて翳りけり  
万緑や池塘にせせる鷺一羽  
たまさかに届く船笛薔薇の園  
風吹かば池に落ちさう軽鳧の子ら  
桐の花谷戸の夜明けの水走り  
舟虫を一斉に追ふ子の眼  
時鳥湖に広がる風の皺  
切れぎれの夫の草笛子ら寄り来

## 帰農の夢

石黒興平

蔀戸を開けて若葉明りかな  
雨音に和して騒がし夕蛙嚇  
奥谷戸の棚田を守りて桐の花  
大利根のきらめく風や麦の秋  
採血の上手き看護師聖五月  
薔薇の香をクルスの尼僧まとひ来る  
本当はねぢれたくなしねぢれ花  
ワクチンに恃む余命や沙羅の花  
朝霧の晴るる嵯峨野や今年竹  
忘じたる帰農の夢や冷し酒

## 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



麦の秋

今村千年

見はるかすポピーの丘や風戦ぎ  
ぼたん散りこころ移るふ夕べかな  
峠一つ越ゆれば母郷麦の秋  
ふるさとの風の匂ひや筍飯  
写メールの百面相やこどもの日  
抱く猫の遠目差や夏の蝶  
冷し酒樺美智子の話せん

釣鐘草

長尾タイ

小判草

大川暉美

釣鐘草事なき今日の鐘を打つ  
蛍火の乱舞の静寂沢の音  
艶やかや月下美人の一夜花小判草  
夏燕川の名かはる合流点  
軽鳧の子や鴉の群るる濁り池  
青葡萄日がな脚立に老の影  
登山靴しまひしままに年重ね

風にふれ波立つ万のポピーかな  
新じゃがや大玉小玉探る手に  
春きて路地の芳し花蜜柑  
十葉や風の澱める庭の隅  
明急ぐ空や残んの細き月  
結界や藍を深むる七変化  
野に踊る光を浴びて小判草

山清水

太田良一

ボンネット

小田嶋野笛

沢音に沿うて下山や夏の蝶  
一息に飲んで一息山清水  
修験者を気取る山道登山杖  
夏霧を払ふ和太鼓能登輪島  
参詣の柄杓に貰ふ清水かな  
裏山の抜け道多し百合の花  
補聴器や夏うぐひすを拾ひたる

合歡の花

岡田史女

かそけさの風吹き抜くる植田かな  
川上は雨続きらし桜桃忌  
青蜥蜴棚田の空をうかがへり  
五つ玉の祖母の十露盤緑さす  
水墨の墨のにじみし夜の薄暑  
午後の日はとろりと眠し合歡の花  
あぢさゐの藍深みゆく日暮かな

老猫の母に母ありカーネーション  
芍薬の散るや約しき日の戻り  
赤い靴号や南風切るボンネット  
敦盛草駆くるつもり母衣かけて  
憂さの種吐くごと枇杷の種とばす  
蝦蛄茹づる鍋に男波の音立てて  
青葉山の夕色葉色雀色

甘野老

加藤静江

あえかなる風を拾ひて甘野老  
薄暑光流れを上る稚魚の数  
音高き小流れ占めて芹の花  
湧水や源かくす草若葉  
芭蕉庵の笥の音や著莪の花  
夏初月皆既月食雲厚く  
列長きワクチン接種夏来る

茄子の花

齊藤マキ子

朝からの手荒き雨や茄子の花  
のべつ犬吠ゆる家なり薔薇の門  
でで虫は殻にこもりて昼深し  
目玉焼流し目となり走り梅雨  
翡翠に機関銃めくカメラの目  
水無月や池にモネの絵出来上がり  
白シャツの一群を吐く朝の駅

翠 巒

高木邦雄

白雨来て三塔けぶる港かな  
翠巒の映ゆる清流魚の影  
梅雨晴間飛行機雲の真白なる  
青嵐風樹の影の伸び縮み  
夕さりの茅花流しや隅田川  
味読する久女句集やほととぎす  
麦秋や穂波に残る風の道



# 青炎集

## 森清

## 堯選



横浜 岡美智子

山鳩のわれを呼ぶやう若葉風  
梅雨晴間櫂大樹のさやぎけり  
振花や螺旋の先の大宇宙  
せせらぎや笹舟を追ひ水馬  
紫陽花や傘傘傘の通学路  
やりかけの刺繍取り出し梅雨籠り

三鷹 小林清彦

新緑や蛍光ペンの走り書き  
ひとことも言はぬ別れや五月雨るる  
あぢさゐやできぬ告白秘めしまま  
拭ひても漂ふ昭和本の黴  
待ち人や虞美人草は風まかせ  
ででむしや行くべき途をとりあぐね

横浜 和田慈子

潤声の遠くなりけり姫うつぎ  
リハビリの歩数伸びたり五月晴  
夏シャツや腕たつぷりの化粧水  
黒南風やサッシの隙の風の音  
片付かぬ予定のひとつ迎へ梅雨  
羽抜鶏吾の気配に走り来ぬ

川崎 平澤侃

主無き山崩さるる花は葉に  
日の本の地震のここだく卯月波  
六義園の草笛の主老い初めて  
軽佻に墓買ひしまま生ビール  
一本の綱の電車や未草  
ありがたうは生きてゐる内夜半の夏

横浜 上月智子

卯の花腐しポットに開くハーブの葉  
餌を狙ふ小さき守宮や息深く  
白きもの白極めたり夏の月  
窓枠の額より発てり夏の蝶  
若き日の直ぐなる思ひ今年竹  
かはほりや陸橋下の雨やどり

横浜 小山ほ子

白雲のアート流るる夏の空  
青嵐くの字くの字ののつぼの木  
明け初むる連山四方の夏霞  
とき色の雲の流れや梅雨晴間  
有明の空に一ト声ほととぎす  
大山をめざして登れかたつぶり

横浜 池谷鹿次

絶え間なく潮吹く岩や虹二重  
風鈴の短冊読めり夕の風  
海原に雲湧き立つや青岬  
どくだみの茫茫として空屋敷  
小鱈とは思へぬ竿のしなりかな  
紫陽花と人に埋もれ寺の道

横浜 野村重子

大粒の雨搔ひ潜り梅雨の蝶  
あぢさゐや今日はきのふの色もたず  
蓮青葉揺り籠にして緑亀  
蝸蛄をかざし破顔や男の子  
白雲を映す蓮池風やはく  
捕虫網掲ぐる子らや燥ぐ声

横浜 渡辺富士子

濃く淡く二段構へや谷若葉  
梶子やかくし事など出来ませぬ  
流鏝馬の出足の呼吸いま一步  
雑踏を切り抜くる技夏燕  
水中花永遠と言ふ御呪ひ  
子育ての人生半ば風薫る

横浜 田中春江

ぶな盆樹の影の涼しき机上かな  
蜘蛛の囀の身丈に適ふ小ささよ  
花あやめ高僧禅師の袈裟の色  
校門は城門なりき蔦青葉  
時の日や時の流れの無為にあり  
桃色のキッチン秤梅漬くる

# 耕 土 集

岡野 里子



日曜の会話乏しき薄暑かな  
針箱の糸を整へ更衣

横浜 岩崎 藍

**化粧ふ時主婦は女に濃紫陽花**

朝刊の記事の重たし梅雨じめり  
想ひ出の碧き箸置き膳涼し

青柳や雨の重さに濡れそぼつ  
万緑に浸るや九重坊ガツル  
**九重連山緑黄緑深緑**

福岡 青柳 節子

若竹の伸ぶる青さや報国寺  
**白雨や熊野古道の石畳**

横浜 西 計郎

山若葉日に透くる葉のゆらゆらと  
休みては一步進みぬ夏の径  
夏の海白き波間の三浦崎

春昼や仔犬顔出すべピーカー  
啄木忌桜前線盛岡へ  
**カステラのしやりりと粗目夏来る**

横浜 松川 昌義

病床の窓の万緑愛づる母

横浜 森川 享

葉裏白き木木のざわめく青嵐  
紫陽花や坂ふり向けば光る海  
しつくりと馴染む庭下駄朝涼し  
**鮎の宿子守歌めく夜の瀬音**

**昼寝子の瞼にひかる涙かな**  
接種終へて射す光明や白日傘

横浜 佐藤 勝代

夏の雨岩を草木を洗ひけり  
**滴りや苔に生まるる小さき風**

横浜 鈴木 英雄

草茂る砲台跡の赤レンガ  
荒磯の灯台聳ゆ日の盛り  
雲海や島の如くに浮かぶ嶺

水遣りてじわりと夏の始まりぬ  
蔓薔薇のことさら赤し雨の中  
**十八区開港祝ふ遠花火**  
FMのジャズ流れをり星涼し  
閉ざされて県庁閑か緑さす

横浜 津野 桂子

**郊外の風の早苗田細ら波**

横浜 村田 敦子

山晴れて湖上へ響くほととぎす  
十葉の群れて浮き立つ白さかな  
入梅や疫病憂ひて鳩の鳴く  
夕暮れて猫濡れ帰る驟雨かな

月蝕の見えぬ夜空や蚊食鳥  
動かざるチンパンジーや園薄暑  
**憂さ晴らす地響き立ちぬ大花火**  
枇杷の実を採る人もなき廢家かな  
子育ての一段落や親鴉

横浜 平田 きみ

初夏の風や袖口捲り上げ  
**新緑の息吹吸ひたり一万歩**

横浜 小林 拓路

走り梅雨鎮痛剤を頼りとす  
青梅雨やジムより洩るる気合ひ声  
舗装路を一目散や大毛虫

七キロの実梅転がす厨かな  
開港の記念の花火控え目に  
隣りの子の名前の一字花葵  
妣好む紫しぼり花菖蒲  
百均や赤きリボンの麦わら帽

横浜 平野 秀子

たをやかに道を問ふ人花空木  
四つに切る新玉葱や電話なる  
**蚕豆の黒一文字夫寡黙**

横浜 小池 桃代

片陰に寄るや荷物を持ち替へて  
菩提寺へ餡餅供へ萩若葉

歌消ゆる老人会や梅雨の午後  
薫風や少年達の一輪車  
読み終へる悲恋小説梅雨の夜  
聞き慣れぬ鳥の鳴き声登山  
街涼し心やすらぐ友の居て

横浜 毛利 直子